



العربية
Deutsch
English
Español
Français

[閱覽](#) [編集](#) [履歴表示](#)



生誕	1894年11月26日  アメリカ合衆国、ミズーリ州コロンビア
死没	1964年3月18日（69歳）  スウェーデン、ストックホルム
国籍	 アメリカ合衆国
研究分野	数学 サイバネティックス
研究機関	マサチューセッツ工科大学
出身校	タフツ・カレッジ（学士、1909年） ハーバード大学（博士、1913年）
博士課程 指導教員	カール・パターソン・シュミット（英語版） ジョサイヤ・ロイス（英語版）
博士課程 指導学生	アマー・G・ボーズ コリン・チェリー（英語版） 池原止戈夫 ノーマン・レビンソン（英語版）
主な業績	サイバネティックス ウィーナー過程 ウィーナー＝ヒンチンの定理
主な受賞歴	ボッチャー記念賞（1933年） アメリカ国家科学賞（1963年）

한국어
Português
Русский
中文

★A 他 43

 リンクを編集

プロジェクト:人物伝

ネル大学大学院に移籍し、哲学を専攻した。翌年再びハーバード大学に戻り、哲学を続けた。**1912年**、**18歳**のときに、**数理論理学**に関する論文によりハーバード大学より**Ph.D.**を授与された。

そして、**ケンブリッジ大学**(イギリス)に留学し、**バートランド・ラッセル**の下で学ぶ。**G.H. ハーディ**の数学の講義に感銘を受けたらしい。**1914年**には、**ゲッティンゲン大学**(ドイツ)で**ダフィット・ヒルベルト**や**エトムント・ランダウ**の下に学ぶ。その後ケンブリッジに戻り、再びアメリカに戻った。**1915年-1916年**にはハーバード大学で哲学講座の講師を一年間務めた。その後**ゼネラル・エレクトリック**で働いたり、**百科事典『エンサイクロペディア・アメリカーナ』**の編集執筆者として働いた後、**メリーランド州**の**アバディーン性能試験場**で**弾道学**に関する仕事に就いた。戦争が終わるまでメリーランドで過ごした後、**1919年**、**24歳**のときに、**マサチューセッツ工科大学(MIT)**数学科の講師の職を得た。ウィーナーは学生の間では、お粗末な講義のスタイル、ジョークや、放心状態となることで有名だった。彼は批判に対して過敏なことで知られ、**躁うつ**的な傾向があった。

MITに勤める傍ら、彼は度々ヨーロッパに渡航した。**1926年**にドイツ移民の**マーガレット・エンゲマン**と結婚し（彼らの間には二人の娘が生まれている）、その後再び**グッゲンハイム**研究員としてヨーロッパに渡った。彼はゲッティンゲンやケンブリッジで過ごしたほとんどの時間を、**ブラウン運動**や**フーリエ積分**、調和解析、**Dirichlet**問題、**タウバー型定理**などに関する研究に費やした。

第二次世界大戦中の、彼の射撃制御装置に関する研究は、**通信理論**への関心を総合し、**サイバネティックス**を定式化することへ彼を促した。戦後、彼は自身の影響力を行使し、**ウォーレン・マカロック**や**ウォルター・ピッツ**らの**人工知能**、**計算機科学**、**神経心理学**の分野における当時最も優れた研究者の幾人かを**MIT**に招いた。しかし後に、突然かつ不可解に、ウィーナーは苦心して集めた彼ら研究チームとの関係を全て絶った。その理由については、ウィーナーの鋭敏すぎる感情や、妻**マーガレット**の関与など、様々な原因が推測されている。いずれにしても、この出来事は、この時代で最も成功を約束されたはずだった科学的共同研究グループのひとつの、早すぎる結末であった。しかしこの**MIT**に集められたメンバーらは、後の**計算機科学**他の発展に影響を残すこととなる。

グループとの断絶にも関わらず、ウィーナーはサイバネティックス、**ロボティクス**や**オートメーション**などの分野で新たな境地を開拓し続けた。彼は研究において才能を発揮し続け、また彼の理論と発見を他の研究者と自由に共有した。不幸にも、**冷戦時代**においてはこの態度は、**ソビエト連邦**の科学者への支持の表明などにもよって、様々な疑念を呼び起こした。さらにウィーナーは**共産主義者**の嫌疑をかけられ、**赤狩り**の対象にもなった。

第二次大戦後、ウィーナーは、科学研究への政治の干渉や科学の軍事化の問題に関心を強く持つようになった。彼は「ある科学者の反乱」(**A Scientist Rebels**)と言う題の論説を**アトランティック・マンスリー****1947年1月**号上で発表し、その中で科学者に対し、自身の研究が持つ倫理的な含意を熟考するように強く主張した。彼自身は軍事関連のプロジェクトで働くことや政府からの援助を受けることを拒絶した。

彼は、オートメーション技術を、生活の質を高め、貧困地域を発展させるのに用いる

という構想の強力な支持者だった。これらの構想はインドに大きな影響を与え、**1950年代**に彼はインド政府に助言を与えていた。**1950年**に記した『人間機械論』で学歴社会を「統治者は永久に統治者であり、兵士は永久に兵士であり、労働者は労働者に運命づけられている」とし、「昆虫は成長の過程で脱皮し、神経系を破壊されるので、幼虫から成虫に多くの記憶を移すことができない。人間以外の哺乳類は学習によって獲得する後天的な能力より、持って生まれた先天的な能力が優先させ、人間と他の動物の決定的な違いは学習である」と述べている^[1]。

1964年、ストックホルム(スウェーデン)において没した。69歳。

主要な著作 [編集]

- *Extrapolation, Interpolation and Smoothing of Stationary Time Series with Engineering Applications* (1949)
- *Cybernetics, Second edition* (1961, 『サイバネティックス 第2版』 岩波書店)

一般向け

- *The Human Use of Human Beings* (1950, 『人間機械論』 みすず書房)
- *Ex-Prodigy* (1953, 『神童から俗人へ』 みすず書房) 自伝。
- *I Am a Mathematician* (1956, 『サイバネティックスはいかにして生まれたか』 みすず書房) 上書の続編にあたる自伝。
- *God and Golem, Inc.* (1964, 『科学と神』 みすず書房)
- *Invention* (1993, 『発明』 みすず書房)

[関連項目](#)
[編集]

- ウィリアム・ジェイムズ・サイディズ
- サイバネティックス
- ウィーナー過程
- マサチューセッツ工科大学
- ウィーナー＝ヒンチンの定理
- ウィーナー＝池原の定理

参考文献 [編集]

- 『フォン・ノイマンとウィーナー — 2人の天才の生涯』 Steve J.Heims 著, 高井信勝 訳, 工学社(1985)

出典 [編集]

1. ^ *The Human Use of Human Beings* (1950, 『人間機械論』 みすず書房)、P50

典拠管理 WorldCat  · VIAF: 51764820  · LCCN: n50016209  ·
ISNI: 0000 0001 2132 8337  · GND: 118632558  · SELIBR: 226450  ·
SUDOC: 030844290  · BnF: cb12353336j  (data)  · MGP: 25222  ·
NLA: 35606928  · NDL: 00460873  · NKC: jn19990009116 

カテゴリ: アメリカ合衆国の数学者 | アメリカ国家科学賞受賞者 | 19世紀の数学者

| [20世紀の数学者](#) | [マサチューセッツ工科大学の教員](#) | [ハーバード大学の教員](#)
| [東欧ユダヤ系アメリカ人](#) | [ミズーリ州コロンビア出身の人物](#) | [人工頭脳学者](#)
| [1894年生](#) | [1964年没](#) | [数学に関する記事](#) | [タフツ大学出身の人物](#)
| [ハーバード大学出身の人物](#)

最終更新 2017年4月6日 (木) 18:51（日時は[個人設定](#)で未設定ならば**UTC**）。

テキストは[クリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンス](#)の下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は[利用規約](#)を参照してください。

[プライバシー・ポリシー](#) [ウィキペディアについて](#) [免責事項](#) [開発者](#) [Cookieに関する声明](#) [モバイルビュー](#)

